

---

# 白き騎士の誓い

青 燐道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白き騎士の誓い

### 【Nコード】

N6811Y

### 【作者名】

青 燐道

### 【あらすじ】

「イス・フェルガナの誓い」。

過去に掲載していた作品。

作者がチェスターが好き過ぎて勝手に書いた生存腐ラグ（笑）

オリジナルキャラも出ますが、生暖かい目で見てください。（笑）

本編（前書き）

世の中に出していいものか解らない作品、その二。

## 本編

自爆装置が起動した瞬間、死を覚悟した。  
これでいい。そう思った。  
だけど…

「…じゅめん…」

零れたのは、涙と謝罪の言葉だった…

### 【白き騎士の誓い】

フェルガナの復興に勤める。  
そういったドギと一時的に別れ、アドルは旅に出た。  
エレナの見送りを背に、大海原へと舟を漕ぎ出す。

「ぶっ…」

漕ぎ疲れ、一息。

(あと半日もあれば陸につくなあ)

青い空、青い海。いつもと変わらない世界。だけど、

「…チエスター…」

アドルは無意識に、魔王ガルバラン封印の為に海へと消えた、白き騎士の名を呟いた。

彼を…、チエスターを救えなかった。

解っている。全ての人間を救える事など、出来はしない。自分が護れるものなど、ほんの一握りだと…。

荷物から水筒を取り出し、一口飲むと、アドルは再び舟を漕ぎ始めた。

\*

とある港町。ここには、アドルの知人がいる。まず、その人物を訪ねる事にした。

港から少し離れた位置。灯台の近くに“彼女”は住んでいる。

「アリサ？いるかい？」

扉をノックするが返事が無い。出かけているのだろうか。

しょうがない、少し街で時間を潰そう。そう思ってアドルは、来た道を引き返そうとした時だった。

扉が開いた。

「あ、アリサ。ごめん、またアポ無しで…」

謝ろつと言いつつ謝を紡ごうとした口は、驚愕で固まってしまった。そこにいたのは、死んだと思っていた人物。金の髪、アメジスト色の瞳の青年。あきらかに、チェスター本人だった。

「どちらさまですか…?」

「チェスター…?」

「え、あ、あの」

アドルの呼びかけに、チェスターは動揺していた。そして、衝撃的な一言が発せられる。

「あなたは、俺の知り合いですか?」

とぼけているようには見えない。この人物は、チェスターではないのか?

アドルの頭は軽くパニックを起こしていた。

「あら、アドルじゃない。いらつしやい」

チェスター(?)の横から、黒髪の女性が現れる。彼女はアリサ。アドルの知人である。

「アド、ル…?」

「ほら、チェスター。前に話したじゃない。赤毛の冒険家。彼がそうよ?」

「アドル…アドル・クリスティン」

「あ、何か思い出しそう?」

頭が痛いのか、こめかみを押さえ、顔をしかめるチェスター。アドルは、その様子を見て一つの可能性が脳裏を横切った。

「アリサ、彼は…チェスターは記憶喪失なのか？」  
「そう、記憶喪失。浜辺に打ちあがっていたのを私が助けた。何、アドル。もしかしてアンタの知り合い？」  
「……………うん」

言えない。本気で殺し合った仲なんて。

数ヶ月前。つまり、例の自爆装置が機動してからすぐの事。浜辺で貝殻と昆布を拾い集めてたアリサは、浜辺に打ち上がった白い物体チェスターに、相当困惑したらしい。  
過去にも、浜辺に打ちあがったアドルを一回拾っているアリサ。

「あの時は、またアンタが打ち上がったのかと思ったわよ」

浜辺に打ちあがるのは、昆布だけで充分！といいつつ、ちゃんとアドルもチェスターも介抱してるアリサは、結構律儀な性格である。

「今後人間が打ち上がったら、絶っつつ対拾わない！！」

「貝殻や昆布より優先順位下なの、僕？」

「…迷惑かけてすまない」

「チェスターはいいの。訳ありみたいだし。…まあ、アドルは確実に昆布以下ね。しょっちゅう浜に打ちあがるみたいだから」

「扱いが酷いっ！！」

「くくっ…」

アリサとアドルのやり取りを見ていたチェスターが、笑った。

そういえば、フェルガナでは、一度も楽しそうに笑った顔を見ていない気がする。( 哄笑は除く )  
まあ、笑える状況では無かった訳だが…。

「んで、アドル。今回は、何の用で私の所に来た訳？」

「あ、ええつと… 忘れた」

「はあ？」

今回の事件の愚痴を零しに来たが正解だが、アドルは言わなかった。言えば、必然的にチェスターの事も話さなくてはならなくなる。内心思っていた。

このまま、記憶が戻らないほうがいい。もう二度と、あんな辛い思いをさせたくない。  
きつと、彼が思い出したら

また死を選ぶと思うから…

\*

暫く、チェスターの様子を見る為、アドルはアリサの元に留まる事にした。

「アンタ、ここに居座るなら、食料を狩るなり何なりしてきなさい。」



という訳で、アドル、単独で一狩りいこうぜ。

「ワカメと昆布、魚ばかりじゃ栄養偏るんだよおおー!!」

数年前、アリサの世話になった時は、魚介類しか出なかったという哀れとしかいいようのない食事情。

今回の目標、肉を食う。byアドル

森の中、悲痛な叫びを上げながら鹿を全力で追いかけるその姿は、後世その地の“森の赤い鬼神”伝説として語り継がれる事となったとかならなかつたとか。三匹目の鹿を狩った時、チエスターが様子を見にに來た。

「あ、アドル…」

「どうしたんだ、チエスター。アリサの所に戻った方がいいんじゃないのか？」

「…少し、話がしたい」

少しオドオドしながら、アドルへ歩み寄るチエスター。近くにあつた丸太を椅子代わりにし、二人並んで座る。

「んで、話って何？」

「アドルは、俺とはどういう関係なんだ？」

やはり來たか。

チエスターは過去を知りたいのだろうけど、話したくないアドルは、口ごもつた。

目だけを逸らし、

「聞かない方が、いい事もあるよ」

そうとしか、言えない。

「どうしてだ？」

「きつと辛い思いをする。思い出したら、後悔しかないよ」  
復讐に駆られ、多くの人を犠牲にし、友を殺しかけ、結果的に世界を壊滅させそうになった。

そして自らの罪を贖う為、自己を犠牲に自爆装置を起動。ガルバランごと海の藻屑となった。…なんて言える訳がないだろ。

そんな辛い現実、どう伝えろと？

「もしかして…そういう関係って事はない…よな？」

「…は？」

チェスターがもの凄く神妙な顔つきで言い放った一言に、目が点になるアドル。

そういう関係？

そういう関係って、どういう関係？

「ちょいまで。チェスター、どっからそういうぶっ飛んだ発想が出てくる?!」

「え、アリサがそうじゃないかって…ち、違う、よな？そんな、恋

…」

「違あう！断じて違あうっ！！」

アリサ、貴様脳味噌涌いてるだろ！つか、なんつー事を吹き込むか！！

「冷静に考えてくれ、チエスター。そんな愉快な変態話を信じたらいけない」

「そ、そうだよな」

何だか気まずい空気が流れる。

…アリサ、あとで覚えとけ。

不意に、背後でガサガサと音がした。また鹿か？とアドルが振り返ると…

「げっ！！」

体長約3メートル越えの熊。しかもアドルにロックオン。

「ヤバい、チエスター逃げ…」

チエスターだけでも逃がそうと声をかけようとした時、目の前を銀色の何かが掠めた。

それと同時に熊の悲痛な鳴き声が響く。

熊の眉間には、銀色のナイフが刺さっていた。

「アドル！」

腕を引っ張られる。二人はその場から走って逃げた。

息を切らし、海岸近くまで逃げた二人は地面に座り込んだ。

「はあ…はあ…も、もう大丈夫だな…」

短い髪を掻きあげ、笑うチエスター。

置いてきた鹿や熊よりも、気がかりなのは、あのチエスターのナイフの投げ方。

あれは、明らかにダガースロー。対峙した時、何度も投げつけられた記憶がある。

「チエスター、あのナイフ…」

「ああ、アリサに護身用に借りたやつだ」

「そうじゃない。あのナイフの投げ方だ。どうしてあんな投げ方出来た？」

「…そういえば、どうしてだ？無意識に投げてた」

無意識とは、なんと怖い。一瞬記憶が戻ったのかと本気で焦った。

まあ、なにはともあれ、当面食肉事情に苦労はせずに済みそうだ。

アドルは、放置していた鹿を持って、チエスターと共にアリサの元へ戻った。

「ごめん、アリサ。短剣を、熊に投げた」

そうチエスターが告げた途端、飛び蹴りが炸裂した。…アドルに。

「痛いな！この暴力女！！」

「アドル、アンタが居ながら、なんつー失態！！チエスターが投げざるおえない状況を作ったアンタが悪い！」

「酷え！責めるところそこのの！？むしろ悪いのは熊！Are y  
o u o k?」

「……………それもそうね、熊が悪いわね」

なんか納得しちゃったよ、この人。

徐に、アリサは壁に掛けてあった剣を持つと、玄関に向かう。

「あ、アリサさん？剣なんて持つちゃって、どちらへ？」

「アドル、チエスター。夕飯作つといて。」

私が帰ったらおかずがもう一品増えるわよ？そう不敵に笑い、出かけていくアリサ。

数時間後、確かに夕飯のおかずが増えた。

しかも、立派な毛皮と、無くした筈の短剣もセットで…。

\*

チエスターは夢をみた。

白銀の世界の中、目の前に誰かが倒れている。その人物は、何かを呻いていた。

地面の雪が、その人物を中心に赤く染まっていく。

鳥肌がたった。

そして自分の手をみて愕然とする。自分が持っているのは、剣。

その剣の刃は、鮮血に濡れていた。

自分が刺したのは一目瞭然である。返り血を浴びたのか、白い服に赤い斑模様が出来ていた。

倒れた人物に、別の誰かが駆け寄ってきた。

赤い髪の…アドル。

『彫像は渡すから…彼を助けてくれ…!!』

叫びに近いアドルの声が響き、そこでチェスターは目を覚ました。

「な…っ、あ、あれは…」

悪夢にしては、それは余りにも生々し過ぎた。

\*

朝日が射し込む部屋、チェスターは毛布を被ったまま窓の外をみる。記憶の無い自分が怖い。あの夢は、一体何なのか。解らない。解らないけど…怖い。

『聞かない方が、いい事もあるよ』

『きつと辛い思いをする。思い出したら、後悔しかないよ』

アドルの言葉が脳裏を横切る。一方で、あの悲痛な叫び声が頭から離れない。

『彫像は渡すから…彼を助けてくれ…!!』

「俺は…何をした…」

苦しい。苦しい。苦しい。

思い出せない事が、こんなにも辛くて苦しいだなんて。涙がこみ上げてきた時、誰かが部屋のドアをノックした。

「…起きてる？」

「アドル…？」

毛布を被ったままドアを開けに行く。

「どうした…？こんな朝早くから」

「うなされてたみたいだから。…もしかして、泣いてた？」

アドルに指摘され、気付いた。慌てて涙を拭うチェスター。

「泣いてなんか、ない」

「そっか。なら良かった」

少し寂しそうに笑い、そして、優しく抱きしめられた。

「…っ、あ、アドル…」

「生きててくれて、ありがとう」

ありがとう。

その一言が、何故か涙を引き寄せる。記憶がなくてもいい。

自分の存在意義を、貴方が教えてくれるから。

「俺は、居てもいいのか？」

「うん」

「ここに、居ても…」

「そつだよ。ここが、君の居場所だ。」

暖かい言葉。

自らが流した涙と共に、先ほどの夢の意味が…理解出来た。

「アドル、君は優しすぎる。」

そつと、抱きついたままのアドルを離す。

「アドル、もう俺の心配はしないでくれ」

「…チェスター？」

「俺なら、もう大丈夫だから」

チェスターは、アドルに優しく微笑みかける。

一筋の涙が、床に落ちた。

\*

アドルは、再び旅に出る事にした。

「冒険家は冒険してないとな。」

チェスターは、そういつて少し寂しそうに微笑んでいた。

「また会いに来るから」

「…ああ」



二人はそういって、握手を交わす。あの時では、決して想像出来ない光景だろう。

「アリサ、チエスターを頼むよ」

「昆布拾い要員として預かっておくわ」

「…いや、それは可哀想だからヤメテ」

「冗談よ。いつてらっしゃい、アドル・クリスティン」

決して冗談に聞こえない発言に一抹の不安を抱きつつ、アドルは二人に背を向け、歩き始めた。

「アドル・クリスティン！！」

後方からチエスターの音が響く。振り返るとチエスターがアドルに駆け寄り…

「…！！な、何を…」

「アドル、必ず、生きて帰って来い」

一瞬見えたニヤリとニヒルに笑うその表情は、嘗ての彼だった。だが、頬を赤らめ、踵を返して（しかも猛ダッシュで）家へと入る時点で、思わず「貴様は乙女か！」とツツコミしかけた。その一部始終を見ていたアリサは、一人思いつきり笑っていた。

「愛されてるわね、アドル」

「黙れ」

\*

自らの手で、救えるものには限界がある。

だけど、

だけど、叶うのならば、

大切な存在を守り続けたい。

だから、僕は強くなりたい。

君を守りたいんだ。

>了<

本編（後書き）

アリサのモデルは元相方です。

赤い鬼神伝説〜フェルガナ(？)編〜(前書き)

赤い鬼神：(笑)

## 赤い鬼神伝説〜フェルガナ（？）編〜

昔々の事。とある地に、それはそれは美しい海と森が存在する国がありました。

人々は、自然と共存し、毎日穏やかに暮らしておりました。ある日の事です。村の若者が、森へ狩りへと行きました。

然し、その日に限って獲物が現れません。どうしたものかと首を傾げていると、何処からか声がします。

「何の声だろう？」若者は、森の奥へと進んでいきました。暫く進むと、開けた所に出ました。

声の主を探しますが、やはりいません。すると、何処からか鹿が若者の方へ走ってきました。鹿は傷だらけのポロポロで、若者の後ろに隠れます。ガクガクと何かに怯えているようでした。

熊でも出たのか?! 若者は身構えました。

…正直、熊の方がまだマシだったかもしれない。

何処かで木が倒れる音がしました。

先程の声、いや怒号の主がどんどん若者の方へ近付いてきています。はありませんか。

若者は恐怖に立ち竦みました。声の方から、凄まじい殺意が感じられたのです。

逃げなければ、しかし、足が動きません。

怒号と共に、声の主が現れ、若者は恐怖で叫びました。銀色の刃を携えた、全身真っ赤な何かが若者の方に走ってきたのです。その目は血走り、この世のものとは思えぬスピードと声。

「鹿もろとも、血の海に沈むがいい　　！！」

殺される。そう直感した若者は逃げました。鹿は赤い何かに捕まり、凄まじい高笑いが森に響きます。命からがら逃げた若者は、こう証言しました。

あれは鬼神だ。赤い鬼神だ！！

それ以降、森には赤い鬼神が出るという噂が国中に広まりました。みなさん、声がしたからといって森の奥に入ってはいけませんよ？もしかしたら、それは森の赤い鬼神の声かもしれません…。

了

赤い鬼神伝説〜フェルガナ(？)編〜(後書き)

楽しかったあああ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6811y/>

---

白き騎士の誓い

2011年11月20日18時59分発行